

今週のメニュー

[トピックス](#)

PVC News No. 70を発行します

塩化ビニル環境対策協議会

[随想](#)

札幌ドームでのこと

東京農工大学大学院MOT、
日本化学工業協会広報委員会顧問 瀬田 重敏

[編集後記](#)

トピックス

PVC News No. 70を発行します

塩化ビニル環境対策協議会

9月16日に塩化ビニル環境対策協議会(JPEC)はPVC News No. 70を発行いたします。本号には、発刊70号を記念して関東学院大学 織教授より特別寄稿を頂きました。

トップニュースでは日本科学未来館に設置されたフラクタル日除けと、関東学院大学の学生たちが塩ビ管リサイクル工場で行った現場研修について紹介しています。

視点・有識者に聞くのコーナーでは「はこだて未来大学」の美馬のゆり教授にご登場頂きました。

No. 70の構成は以下の通りです。

特別寄稿

『PVCニュース70号によせて』 関東学院大学 法学部教授 織 朱實 氏

トップニュース1

『日本科学未来館が塩ビのフラクタル日除けを試験展示』

トップニュース2

『関東学院大学の学生が塩ビ管リサイクル現場の研修会』

視点・有識者に聞く

『双方向の科学コミュニケーションをめざして』

はこだて未来大学 教授 美馬のゆり 氏

リサイクルの現場から

『エコシステム千葉の産廃中間処理事業』

塩ビ最前線

『活気ある都市景観を生む、塩ビターポリンの屋外広告』

広報便り

『下水道展でリサイクル管などを紹介/塩化ビニル管・継手協会』

『越谷エコフェスタに参加/塩ビ工業・環境協会』

掲載記事をいくつかご紹介いたします。

今号はトップニュースを二つとしました。一つ目は、日本科学未来館のエントランスホールに設置されたフラクタル日除け。開発された京大の酒井先生からもコメントを頂き、フラクタル日除けの効果などを載せています。8月の台風11号襲来時には、強風に激しく揺れる周辺の樹木とは対照的に、フラクタル日除けは静かな姿のままで、風通しの良さが証明されました。

二つ目は、関東学院大学の学生たちが塩ビ管リサイクル工場の実際の現場で、二日間わたって行った研修を紹介しています。初日、学生たちは塩ビ管リサイクルの現状などの説明を受けたあと、塩ビ管を種類別に6つのパレットに分別する作業を行いました。二日目は、リサイクル塩ビ管の製造工場で粉碎された原料が再び塩ビ管になるまでを見学しました。

学生たちは分別する大変さ、物作りの大切さを実感し貴重な体験となった様子でした。

「視点・有識者に聞く」のコーナーでは『双方向の科学コミュニケーションをめざして』と題し、はこだて未来大学の美馬のゆり教授のお話。「科学コミュニケーション」とは、科学者は科学について市民に説明し、市民は科学者から積極的に学ぶ、それによって科学者も市民から学ぶことが出来る、「科学者と市民との架け橋の活動」と述べられています。

はこだて未来大学は、オープンスペースを多用した校舎、ガラス張りの教室や教員研究室により、学年・グループの別なくコミュニケーションがとれ、情報の流通が起こるように設計されています。美馬先生は大学の理念の策定からカリキュラム作り、校舎のデザイン、備品の選択にも携わり、大学を「学びとコミュニケーション」の実験場とされています。

『PVCニュース』はJPECのホームページから、最新号、バックナンバー共にご覧頂けます。(No.70は、9月16日以降掲載です。)

<http://www.pvc.or.jp/>

ご講読を希望される方は、下記メールアドレスまで、送付先・TEL・希望部数などをご連絡下さい。

info@vec.gr.jp

随想

札幌ドームでのこと

東京農工大学大学院MOT、
日本化学工業協会広報委員会顧問 瀬田 重敏

6月2日、札幌市で同僚と所用を済ませた帰路、札幌ドームのそばを通りかかったので、日本ハム - 広島戦試合の観戦に入った。1塁側(広島側)のボールに近い内野観客席の高い位置に座し、応援合戦も含めてセパ交流戦を楽しんで帰ったのだが、ひとつ気になることがあった。

それは、試合開始に先立ち、場内アナウンスに導かれて小学生7 - 8人が入場し、ホームベース近くに整列して「君が代」の斉唱をしたときのことであ



る。観客も全員が起立して君が代を歌ったのだが、内野の端の高い席から見ると、日本ハムのベンチ前に並んだ選手はたった5人だった。しかも君が代が終わり、小学生たちが列を作って戻りかけると、ベンチの奥から選手たちがぞろぞろ出てきて試合開始前の準備を始めたのである。

私も昔から米国出張時には時間を作ってよく大リーグを観戦に行ったし、近頃は米国の大リーグを観戦する人が随分と増えている。試合前のプロ歌手による米国国歌の印象的な独唱や国歌国旗に対する選手たち（米国人だけではない）の真摯で敬意あふれる態度に感銘を受けた人も少なくないと思う。

平成21年の日本の選抜高校野球の開会式で、女子高校生による君が代のすばらしい独唱があり、観客が総立ちとなって聞いた光景は、TVだったが記憶に新しい。もし大リーグに移籍した日本人選手の誰かが星条旗や米国国歌に対して今回の日本ハムの選手のような態度をとったとしたら、どうだろうか。

皆が君が代を歌い終わったあと、ベンチ前に並んだ日本ハムの5人の選手のうちの1人が、観客に対してかこれからの聖なる戦いの場であるグラウンドに対してか、深々と一礼した。その選手は稲葉選手だった。稲葉選手は国際試合を何度も経験しているので、自然にそうした態度が出たのだろう。その行動はまことにさわやかだった。

いろいろ問い合わせてみると、試合前の国旗掲揚国歌斉唱はパ・リーグの申し合わせだが、観客や選手たちが並んで斉唱するかどうかは「個人の自由意思」を尊重するということらしい。せっかくリーグや球団がアメリカ大リーグのよい習慣を導入しようとし、子どもたちを呼んで歌わせ、観客も全員立ち上がって斉唱しているのに、選手たちの大半が参加しない光景は内外野の殆どの観客席からまことによく見えたと思う。

その約1カ月後、今度は家内と一緒に東京ドームに日米大学野球を観に行った。ここでは当然両国の国歌演奏・国旗掲揚が行われたが、ホームベースから三塁線に沿って監督・コーチ以下米国の選手全員がずらりと並び、また本塁ベースの審判団をはさんで一塁線上には日本の選手が同様に全員スコアボード上の両国国旗に向かって姿勢を正して立ち、帽子を胸に当てて両国国歌の演奏を聞き敬意を示した。このとき、日本選手たちが「自由意思」だとか言って、歯抜けみたいにパラパラとしか整列しなかったらどうだっただろうか。幸いにして、日本の大学選手たちはきちんとした礼節ある態度をとった。

またその1か月後、今度は広島球場で行われたオールスターゲーム第2戦では、「ケミストリー」の2人の歌手が君が代を唄ったという。残念ながら私は聞けなかったが、すばらしい雰囲気だったことだろう。そういえば第1戦は札幌ドームだった。ここでも国歌がうたわれた筈だが、オールスター選手たちは「自由意思」を發揮してパラパラとしか参加しなかったのだろうか。

なぜ、日本では「個人の自由意思」により国歌国旗が尊重されず、「個人の自由意思」がはるかに尊重される米国で国歌に対する礼節が保たれるのだろうか。

国歌国旗は国の象徴であり、それに礼を尽くす姿勢は「個人の自由意思」より前に国民としての当然のことだろう。私はもうひとつ、それは「マナー」なのではないかと思う。国際試合の場合、ビジターの国の国歌国旗に対して礼をつくす姿勢、それは受け入れた国の側の国民としてのマナーであろうし、それなら横に並んでいる日の丸や同時に演奏される君が代には礼を尽くすのは当然だ。招待された子どもたちが先導し、観客が起立して歌うならば、主役たる選手が姿勢を正して斉唱に参加するのは、「自由意思」とは別に、歌った子どもたちや集まってくれた観客に対するマナーだろう。日の丸や君が代は軍国主義の

汚辱にまみれている、という意見がある。しかし日本は、民主主義の手続きを踏んで、変えない道を選択したのだ。マナー違反は本人が想像するよりはるかに目立つものなのだ。

「個人の自由意思」の内容を聞かれて、「何となく」という返事が返ってこないと信じたい。

野球にせよサッカーにせよ、国際試合では、参加国の国歌の演奏・国旗掲揚は当たり前となり、少なくとも外国の選手たちが胸に手を当てて、演奏される国歌に合わせて歌う姿は見慣れた映像となった。彼らの姿は、戦後の教育でわれわれ日本人が忘れていたものを気づかせてくれる。その意味で、さまざまな国際試合や行事が日本で行われるのは大変いいことなのだろう。

友人たちにこの話をした。私と同世代の70代初めの人間はもちろん、今は社会の中軸をなす40代、50代の後輩たちもみな、君が代と日の丸を無視する人々の態度、それを許す周囲の姿勢を非難した。40代、50代といえれば戦後の教育を受けた人々だ。

それにしても稲葉選手の行動には他の選手たちのマナー不足を補う、申し分のないさわやかさがあった。(了)

前回の「世が不況に向かうとき」は、下記からご覧頂けます。

<http://www.vec.gr.jp/mag/213/index.html>

編集後記

9月になり朝夕はめっきり涼しくなりました。新聞やテレビでは政権交代とインフルエンザの話題が専らですね。

涼くなったせいか電車内で咳をする人が増えてきました(気のせい?)。喉の調子が悪く軽く咳をしているのですが、こちらはつい注目してしまいます。スーパーでは既に従業員がマスクをしていました。インフルエンザの流行が本格化すると更に神経質になるのでしょうかね。景気の面からも心配です。景気対策の効果が早く出て、この様な懸念をぶっ飛ばしてほしいものです。(可)



関連リンク

[メールマガジンバックナンバー](#)

[メールマガジン登録](#)

[メールマガジン解除](#)



編集責任者 事務局長 東 幸次

東京都中央区新川 1-4-1

TEL 03-3297-5601

FAX 03-3297-5783

URL <http://www.vec.gr.jp>

E-MAIL info@vec.gr.jp